

氏名(本籍)	坂野雄二 (埼玉県)
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第164号
学位授与年月日	昭和58年11月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	モデリングによる認知的行動変容に及ぼす言語化の効果
主査	筑波大学教授 医学博士 内山喜久雄
副査	筑波大学教授 教育学博士 福沢周亮
副査	筑波大学教授 教育学博士 小林重雄
副査	筑波大学教授 医学博士 佐々木雄二
副査	筑波大学教授 中野良顕

論文の要旨

(1) 本論文の構成

本論文は全6章および文献ならびにあとがきから構成されている。

(2) 研究の目的

本研究の目的はモデリングによる認知的行動変容に及ぼす観察者の言語化の効果を実験的に検討することである。すなわち、課題解決学習場面において、言語化がモデリングによる学習に及ぼす効果(実験1)、モデリング課題の難易度との関係における言語化の効果(実験2)をそれぞれ検討し、さらに、これらをふまえて恐怖反応の消去という具体的な行動変容場面における言語化の効果(実験3)を研究・考察することが本研究のねらいとするところである。

(3) 研究の方法

前項の目的を達成するために、以下に述べる一連の実験が行われた。被験者は実験I, IIで男女大学生, 実験IIIで女子大学生である。

① 実験I

弁別学習場面を用いたモデリングにおいて、観察者(被験者)が行なうモデリング刺激の言語化の学習に及ぼす効果を解明するために1予備実験ののち、3種の実験が行なわれた。

まず、モデル観察に伴なって観察者に内潜在的な反応が喚起されるという予備実験の結果にも

とずいて、実験Ⅰ—(1)では観察者にモデリング刺激を自由に言語化させ、その内容分析を行なった。また、実験Ⅰ—(2)では実験Ⅰ—(1)の結果をもとに、課題の適切次元に対する言語化を行わせる条件を設定して、さらにまた、実験Ⅰ—(3)においては言語化にリハーサルを付加した条件を設定して、それぞれに言語化の効果に検討を加えた。

② 実験Ⅱ

モデリング学習において観察者に入力されるべき情報を規定する諸要因のうち、モデリング課題の難易度との関係の中で観察者による言語化の効果を検討するため、以下の2実験が行なわれた。本来、モデリングにおいては課題がモデルを介してあたえられるために、客観的に同一の難易度をもつ課題であっても、モデルの反応様式により、観察者にとっての主観的難易度をはからずしも同一とはかぎらない。したがって、本実験においては課題の難易度として、課題そのもののもつ客観的難易度と、モデルの反応様式を介してあたえられる課題の主観的難易度の両者を実験条件として検討した。前者が実験Ⅱ—(1)、後者が同Ⅱ—(2)である。

③ 実験Ⅲ

実験Ⅲに先立って、前述の実験Ⅰ、Ⅱおよび本研究に関連する著者の先行研究結果に基づいて、具体的な行動変容の手続きが提唱された。次いで、モデリングにおける観察者の言語化の効果を恐怖反応の消去という具体的な行動変容場面において検討するために、ネズミに対する恐怖反応を示す女子大学生を被験者として、以下の3実験が行なわれた。

実験Ⅲ—(1)では、参加モデリング、受動的モデリングという2条件の下で観察者（被験者）による言語化の効果に検討を加えた。

実験Ⅲ—(2)、同Ⅲ—(3)においては観察者による言語化をより確実なものとするため、言語化を強制的に固定化させる手続きを導入した。また、リハーサルに関する結果にもとずいて、内潜在的な言語化を行わせる条件も設定された。そして、恐怖反応の行動的、認知的ならびに生理的の3側面ないし観点から言語化の効果に対する検討を試みた。

(4) 研究の結果および考察

上述の諸実験による結果ならびにこれに対する考察は以下の通りである。

① 実験Ⅰ

モデル観察によって喚起された内潜在的な反応を外顯的に言語化することによってモデリングによる学習の促進が認められ、その際、モデリング刺激の中でもとくに課題の適切次元に対する言語化が学習の成立と保持に促進的な効果を有することが観察された。一方、課題解決と関連のない言語化は学習に対して抑制的に機能した。

モデリング刺激のリハーサルは学習成績の即時的な上昇に効果的であったが、長期的にみれば、リハーサルは必ずしも必要ではなく、言語化が効果的であった。

② 実験Ⅱ

モデリング課題の客観的困難度が低い場合にはモデリングが成立しやすく、学習成績は良好であるが、難易両課題ともに、学習が進行するにつれて言語化の効果が発現してきた。課題の

困難度が高い場合には、学習の初期において言語化の効果は認められなかったが、学習が進行し、観察者の言語化量の増大に伴って学習成績が上昇した。

学習の成立については正反応率の高い（主観的困難度の低い）モデリングが有効であったが、正反応率の低い（主観的困難度の高い）モデルでは、学習成績は観察者による言語化に依存していた。また、学習の保持と転移は、課題の難易度の如何にかかわらず、主として観察者の言語化に依存しており、一般的にモデリング学習における言語化の重要性が認められた。

③ 実験Ⅲ

参加モデリング群、受動的モデリング群のいずれにおいても、恐怖反応の消去が認められ、モデリング効果が確認された。恐怖反応の行動的側面を測定する回避行動得点では、参加モデリングの効果が著明であったが、認知的側面を測定する恐怖反応の自己評定では逆に観察者による言語化の効果が顕著であった。この結果は観察者による言語化が認知的変容に効果的であることを示唆している。

恐怖反応の消去はいずれの群においても認められて、モデリングの効果が確認され、また、行動変容は言語化により促進されたが、とくに、内潜在的な言語化は恐怖反応の認知的、生理的両側面の変容に効果的であった。

恐怖反応の行動的、認知的、生理的側面をそれぞれ測定する3種の測度間には、いずれも、かなり高い相関関係のあることが認められ、観察者による言語化を伴ったモデリングによる行動変容がこれら3側面に並行して生起していた。

本実験においては、先行実験ⅠおよびⅡにおいて確認された観察者による言語化の効果が恐怖反応の消去という行動変容場面においても確認された。

審 査 の 要 旨

本研究は、従来、「モデリング療法」といわれている認知的行動変容法において、モデリングによる学習に本質的な役割を演じている観察者の言語反応に着目して、観察者による言語化の機能と効用を基礎的な学習実験において確認し、さらにこれを具体的な行動変容法として臨床領域に応用することで所期の成果を達成したもので、基礎研究から臨床的実験に至る一連の研究の方略ならびに手法にみられる独創性と有効性は高く評価される。

その性格上、本研究は実験デザインについて今後なお検討すべき点も残しており、また、かなり長期にわたる変容効果の持続性に関する検証や一般臨床場面への適用限界などについてもなお究明の余地なしとしない。

しかしながら、本研究が在来の行動変容理論において顧みられることの少なかった認知的変数に独自の検討を加え、モデリング療法に関する研究に新たな視点を導入したことは明らかで、本領域における貢献度は大なるものと言わざるをえない。また、本研究において採用され、その有効性を

認められた認知的介入方法すなわち言語化を伴うモデリングによる行動変容方式は、今後、神経症、神経性習癖、心身症その他、不安、恐怖等を基底とする諸種の病態への対応策に重要な示唆を提供するものと思われる。

よって、著者は教育学博士の学位を受けることに十分な資格を有するものと認める。